

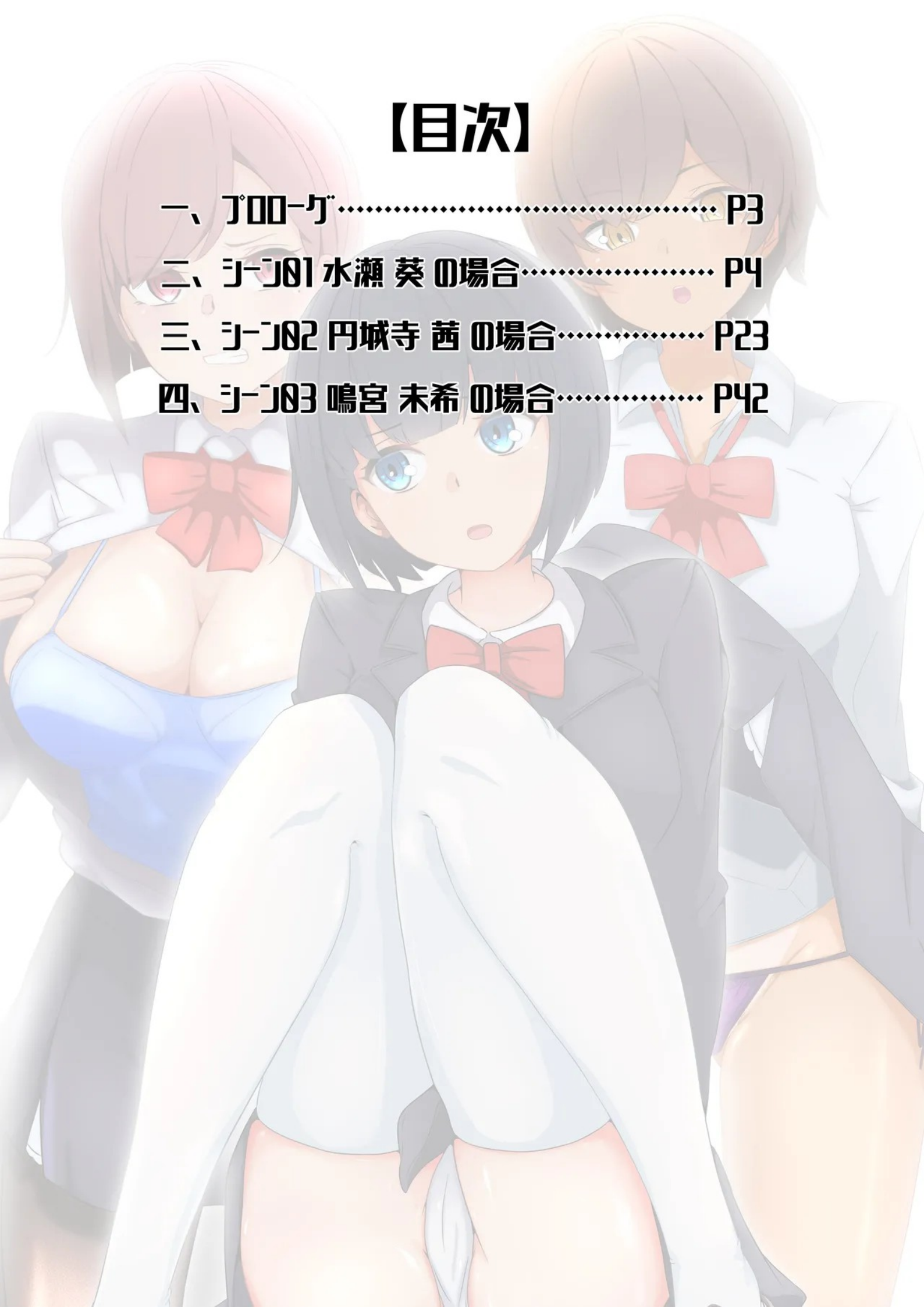


# ふっかけ見抜きカール

~水泳部JK編~

# 【目次】

- 一、ジョージ ..... P3
- 二、ジョ1 水瀬 葵 の場合 ..... P4
- 三、ジョ2 円城寺 茜 の場合 ..... P23
- 四、ジョ3 鳴宮 未希 の場合 ..... P42



## 【プロローグ】

僕はSEXに興味が無い。

正確に言うなら「本番行為」に興味がない。いや、興奮できない。

そういうと性欲が無いのかと思われるかもしれないが、そんなことはなく、むしろ人よりも強いくらいだ。

ただ、特に女性と接点もなく、見向きもされずに生きてきた僕が女性と裸で交わることが想像もできない。

こんな僕のために裸になつてくれる女性などいない。

こんな僕がセックスなんてしてはいけない。

そんな卑屈な自意識のせいで、僕の性癖はゆがんでいた。

僕が興奮するのは、

女性の前で情けなく自慰行為をすること。

いわゆる「見抜き」だ。

女性に性交渉を拒否され、男性として否定される。

ふれることもできない、ふれてももらえない。

できることは、情けない姿を女性に見られながら

自分で自分を慰めることだけ……。

そんな状況にたまらなく興奮する。

僕はそのゆがんだ性癖を満たせず、持て余していた。

そしてついには、SNSで裏アカを作って、

見抜き相手を募集してしまった。

見抜きただけだが、謝礼は普通に風俗で払う額の倍以上。

自分への過小評価の表れだ。

だからこそ、

それでも連絡をしてくる相手などいないだろうと思っていた。

情けない募集をしている僕を、

見かけた女性が笑っているかもしれない。

僕にとっては、その事実だけでも興奮するには十分だった。

それが、まさかこんなことになるなんて……。

その時の僕は想像もしていなかった。

# 3-1-1 水瀬葵の場合

# 水瀬 葵

Aoi Minase

156cm

B:81

W:56

H:80



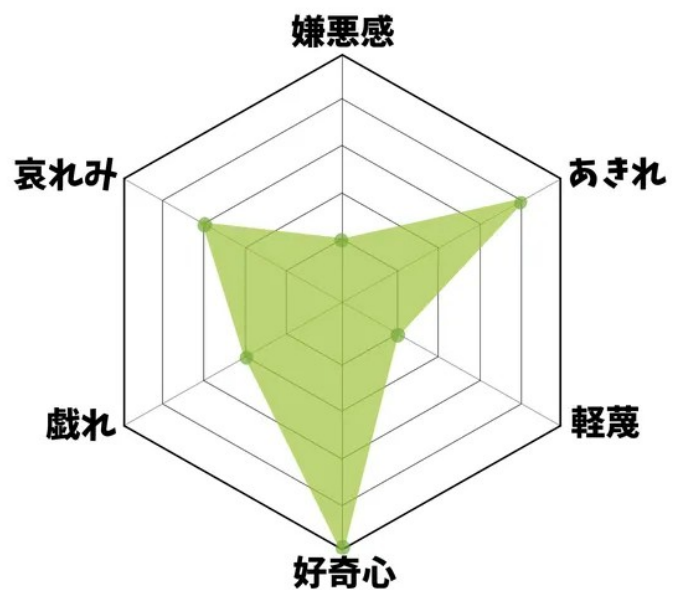
高校1年生で水泳部部員。

基本的に言動ともに礼儀正しくおとなしい性格。  
ただ、気が弱いわけではなく、芯は強く頑固な一面も。

前に出るタイプではないためクラスで大人気的女子というわけではないが、  
おとなしい性格とは反対に、小柄ながらも部活で鍛えた引き締まった体のギャップに、ファンも少なくない。

高校生になるまで異性にも特に興味はなかったので、  
周りの友達のえっちな話にあまりついていけなかった。

そのため、最近、性知識が無さ過ぎて仲間外れになるかもとの危機感から、  
ネットで性的な話題について調べ始めたのをきっかけに、  
自分が異性の性行為について強い興味があることに気づく。



水瀬葵は、その性への好奇心から、日常的にSNSで性的な話題を調べあさっていた。そんな時、「僕」の裏アカの見抜き相手募集ツイートをみつける。

お金には特に困っていないなかったものの、男性の自慰行為に興味があり、実際に見てみたいと思っていたことから、悩みながらも好奇心に負けて、「僕」に連絡をする。

当初、見ず知らずの大人の男性と会うことに不安もあったが、いくつかのメッセージのやりとりを経て、ある程度信頼できると判断し、結局会うことを決める。

その際、条件として

「制服着用、部活で使っている水着持参。

場所は休日の学校。精液がかかる場合もあるので、替えの制服も用意。」  
ということになった。





手が止まらない。

自慰行為を覚えてたての少年のように、無我夢中にしごいていた。

連絡していた時の印象は、礼儀正しく控えめな女の子。写真だと照れるのか地味に写っていた。しかし、実物は小柄で飾り気は無いものの、

目はクリッと大きく、幼さを残しながらも顔は整っていて、体も健康的に鍛えられている。

きつとクラスでもそれなりに人気のある女の子なのだろう。

彼女の事を思って今の僕のように情けなく自分を慰めている男子も一人や二人じゃないはず。

そんなかわいい女の子の体を、僕はいやらしい目でなめまわしながら情けなくもひたすらに、ギンギンに腫れあがった自分のそれをしごきつつけている。

彼女は恥ずかしそうにしながらも、チラチラと固くなった僕のそれに目をむけてくる。

興奮した状態の男のモノに興味があるのだろうか。

なにせよ、見られるたびに僕のそれはビクンと熱く脈打ち、彼女はそれを見て顔を赤らめる。

彼女の目の前で射精すれば、どれだけ気持ちいいのだろうか。

その快感を想像したと同時に、僕は限界を迎えた。



精子がかかる場合もあると前もって言っただけはいたものの、あんなにもぶっかけてしまうつもりはなかったので内心ひやひやした。

しかし、彼女は初めて見た自分に向けられた射精に驚きながらも、特に怒る様子にはなかった。もしかすると、慣れていない分、そんなものだと思ったのか、それとも驚きの方が勝っていたのか。

どちらにせよ、ぶっかけまで暗黙の了解が得られたことに僕は歓喜した。

普段なら考えられないほどの量を信じられないほど飛ばした僕のそれは、いまだ勃起がおさまらない。

むしろ自分の汚い精子に汚された彼女の姿により一層力強く脈打っていた。

興奮冷めやらぬ僕は、次のリクエストとして

床に寝そべって下着を見上げる体勢でほしいと彼女にお願いした。

少し顔を赤らめながら体についた精子をふき取っていた彼女は、

僕の勢いに面食らっていたものの、

僕が恥ずかしげもなく床に寝そべり、自慰行為を始めると、

彼女は少し戸惑ったが、あきれながらも僕に下着が見えるように立ってくれた。



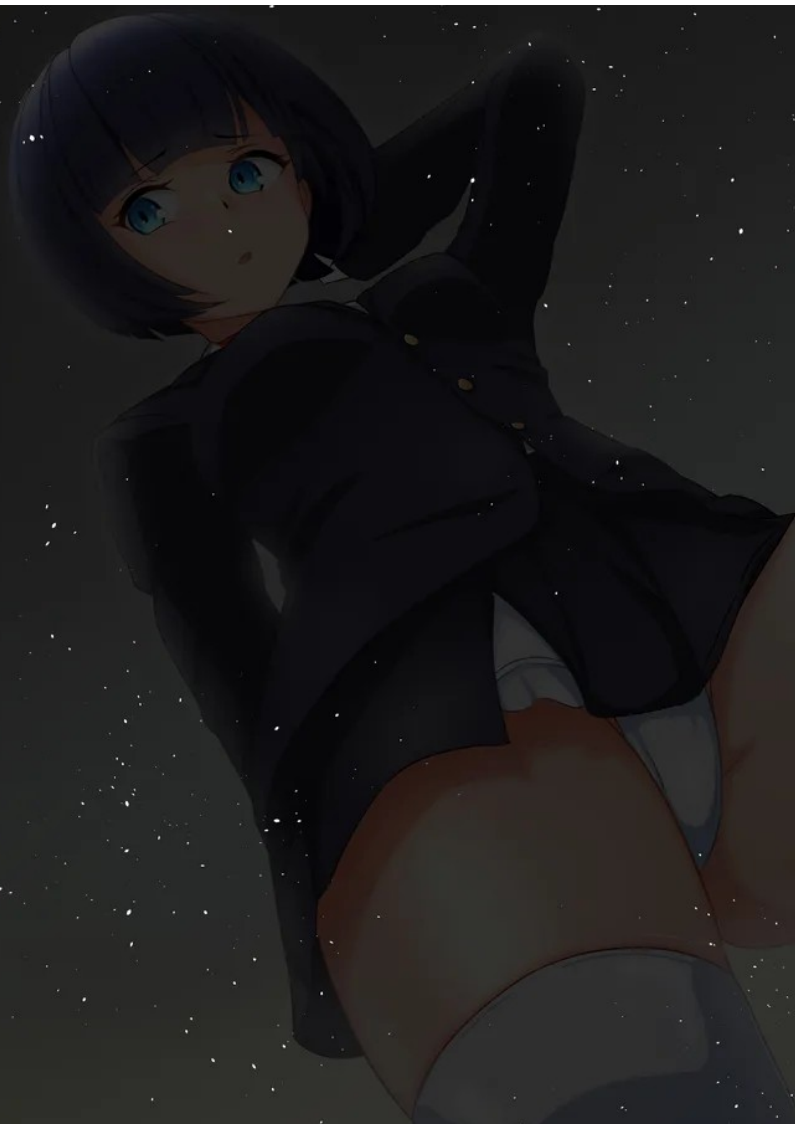
一度見たことで慣れてきたのか、  
あるいはあまりの僕の情けない姿に、かえって気が抜けたのか  
彼女の態度は少し砕けていた。

先ほどまで僕のをそれを見て顔を赤らめていた少女が、  
今では少しあきれた様子で僕を見下ろしている。

そのどうしようもなく情けなく恥ずかしい自分の状況に、  
僕はさらに興奮した。

こんな状態で射精したら彼女はさらにあきれるだろうか。  
いや、あきれてくれるだろうか。

そんな汚れた期待を胸に抱きつつ、  
僕は二度目の射精を迎えた。





二度目の射精でようやく暴走していた僕のそれは一度おさまってくれたようだ。

ちよūdいタイミグだったので、次は用意してもらった水着に着替えてもらうことにした。

着替えた後、プールで合流することになり、彼女は僕にプールの場所を伝え、先に更衣室に向かった。

僕は自分でまきちらしたものを掃除していたが、その量と濃さにどれだけ自分が興奮していたのか改めて驚いた。

変態である自覚はあったが、まさかここまでだったとは…。

そんな自己嫌悪をしていた僕だったが、ふと着替えに行った彼女の水着姿を想像すると、気づけばまた勃起していた。

…僕はどうしようもなく変態だ。

うわあ…。あれだけ出しといてまだそんなになるんですね…。  
え？水着のせい？  
…ど、どーも。でも、これはいつも部活の時着てるやつですよ？  
男子部員も別に気にしてないですし。  
さっきまで見られてた下着の方がよっぽど恥ずかしいですよ。

というか、水着に着替えた上でわきを見せてなんて…。  
はあ…。もう十分わかってますけど、本当に変態ですね。

ズルズル…

みんちゅ

おちん♡

シクッ

シクッ  
シクッ  
シクッ  
アッ

おめおめ

どちゅっ  
ちゅ

シクッ

しゅっ

ニエ  
ニエ  
ニエ  
ニエ

おめおめ

水着に着替えた彼女を見た時、ぼくのそれは大きくはねた。

普段から人前で着ていることもあってか、

彼女はさっきよりも見られることに落ち着いている様子だった。

ただ、本人は慣れているとしても、

客観的に見れば、水着は制服と違い何ひとつ体のラインを隠さない。

とりわけ競技用の水着はぴっちりと体に張り付き、さらにその健康的な肉感を強調する。

装飾の無い性能重視の水着を性的な目で見ていることも背徳感をつのらせ、より倒錯した興奮を覚える。

男子部員も気にしていないというように言っていたが、

おそらくたくさんの男子部員がこの姿を思い出し、それをおかずに自分を慰めてきただろう。

その中には彼女に恋心を抱いている部員もいたかもしれない。

未来の彼氏もいたのかもしれない。

そんな部員を差し置いて、情けなく醜い僕がこんな変態行為をしている。

ゆがんだ優越感の中、僕はまた彼女を汚した。

…んっ、はい。出ましたね。

見たがってたわきにもご丁寧にしっかり届かせてますね…。  
…まあ、なんといいいますか、お疲れ様です。

というか、まだこんなに残ってたんですね…。  
さすがにもう慣れたと言いますか、ふう…正直ちよつとあきれています。



最初の顔を赤らめ驚いていた少女はもういない。

立て続けに僕の変態性を目の当たりにし、恥ずかしさよりもあきれが上回ったのだろう。彼女の目には、先ほどまで多少なりとも残っていた緊張感と不安の色はもう無い。どこかあわれみを帯びた目で、体に付着した僕の汚い精液を見つめている。

彼女に恋心を抱いている男が、そんな彼女の目を見れば心が折れていたかもしれない。ただ、僕は違う。

彼女の魅力に惹かれていると同時に、自分のような変態は彼女に釣り合わないと自覚している。

だからこそ、

もはや一人の男として見てもらえないことをあらわしている彼女のあわれんだ目は、どうしようもなく僕の股間を熱くさせる。

理解しているからこそ、

情けなくお金を払って、みじめに自慰行為にふけるしかない自分の姿を見てもらえることで、ひたすらに興奮している。

もっとあきれられたい。

異性として否定されたい。

そんなねじまがった欲求から僕は最後のお願いをした。



はあ

ぶるん♡

グニャッ

シヤッシヤッ

ヒキッヒキッ  
クニャッ  
クニャッ

んんん

あはは

あなたに興味ない感じで  
振り返らず寝そべってて...

後ろからめちやくちや変な音聞こえてるこの状況では  
普通気になって振り返りませんか？不自然じゃないです？

：興奮して、しごく手がとまらない？  
：はあ。まああなたはそういう人でしたね...

もう、止めないの？自由でござ...

クニャッ

僕は最後のお願いとして、彼女に背を向けてもらった。  
ふれられる、ふれてもらえる等のレベルではなく、  
見てもらう事さえ叶わない。

こっちは馬鹿みたいに  
自分のそれをギンギンにさせてしごいているのに  
彼女はそれに興味を示さない。

その背中から、  
男、いやオスとして価値が無いと伝えられているような拒絶感。  
それがどうしようもなく僕のゆがんだ性癖を刺激する。

もちろんこれは僕のお願いであって、  
彼女の優しさで行われているごっこ遊びだ。

ただ、それでも、  
当初不安を抱え、初めて見る男性の射精に赤面していた普通の少女が、  
今ではもう余裕をもって僕の必死のお願いを  
あきれながらも、こなしてくれている。

そんな異様な状況からくる背徳感もあいまって、  
僕のそれは、ここまで酷使してきたのにもかかわらず、  
今日一番の固さと熱さを迎え、

そのままの勢いで彼女の無言の背中に果てた。



彼女の後ろ姿に僕は最後の一滴まで絞り出した。

彼女はその熱い粘液がかかるたびにビクビクツツと反応していたが僕の射精がおさまると、少し皮肉めいたことを言ってそのまま振り返らず更衣室に消えていった。

最後彼女はどんな顔をしていたのか  
ついにあきれ果ててしまって、もう会ってもくれないのだろうか。

へこみかけていたところで、ふと、思い出す。

彼女が背中越しに行った最後の言葉。

「それでは、また。」

それはただ形式的なあいさつに過ぎなかったのかもしれない。

それでも、二度と会いたくない人間には言わないだろう。

次があるなら、今度はどんな事を…。

そんな期待に、また少し熱くなったモノを抑えつつ、

僕は家路についた。

3-1-02 円城寺 茜 の場合

# 円城寺 茜

Akane Enjyoji

165cm

B:91

W:61

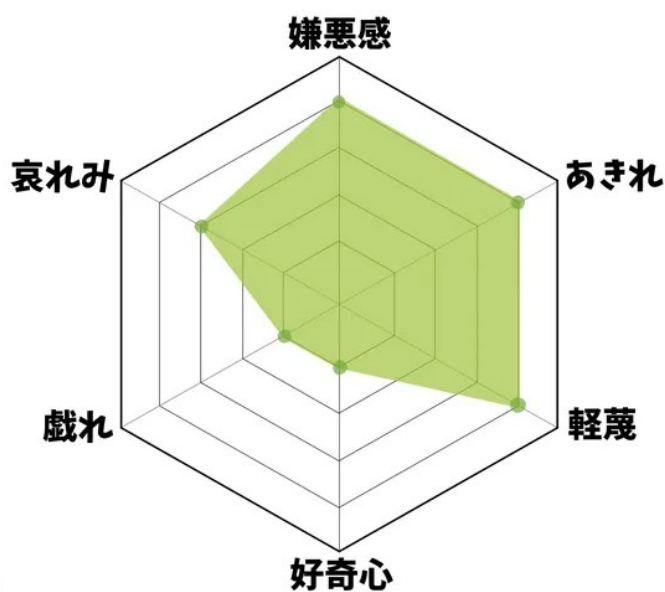
H:85

高校3年生で水泳部キャプテン。

誰にでも厳しく向き合うので怖がられることも多々あるが、  
なにより自分に厳しいため、  
そのことを知る顧問やチームメイトからの信頼は厚い。

男子にも物怖じしない勝気な性格から煙たがられることもあるが、  
暴力的なそのスタイルにMっ気のある男子から大人気で、  
怒られることを楽しみにしている者もいる。

やや頭が固いところもあるが、  
親身になってくれるので相談してくる友人も多い。  
もっとも性的な話題に関しては特に厳しく、  
たまにやってくるそのような相談には厳しく叱責することもしばしば。



「僕」が葵と会った日、茜は学校に忘れ物を取りに行った際に、こっそり裏門から出てくるあ「僕」と部活の後輩である葵を見かけた。こっそりと出ていく様子を不審に思い、茜は後日、葵を問い詰める。

最初はだまっていた葵も、ごまかしきれないと観念し、「僕」との関係を話す。

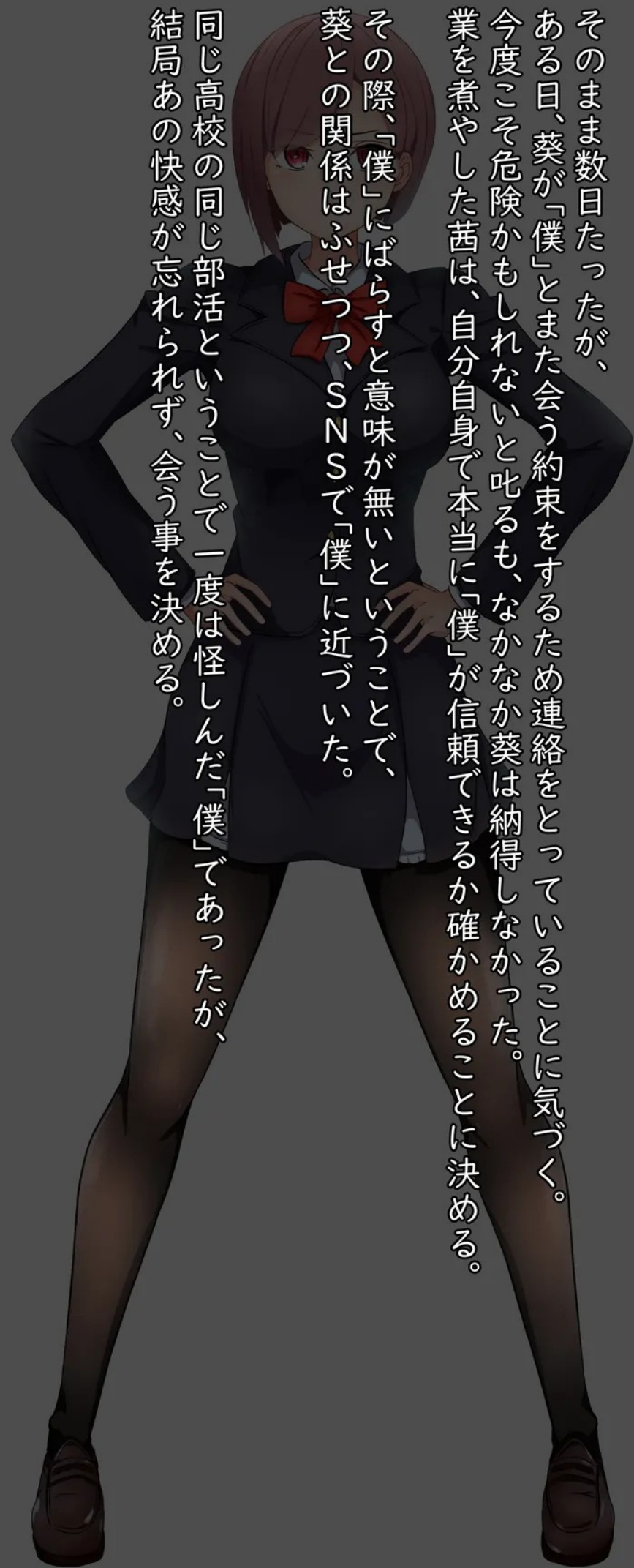
茜は憤り、当初、学校に報告しようと思ったが、合意であったこと、けして嫌な事はされなかったこと、詳しく調べられると葵自身も学校から罰せられる可能性があることを鑑み、しぶしぶ思いとどまる。

そのまま数日たったが、ある日、葵が「僕」とまた会う約束をするため連絡をとっていることに気づく。

今度こそ危険かもしれないと叱るも、なかなか葵は納得しなかった。業を煮やした茜は、自分自身で本当に「僕」が信頼できるか確かめることに決める。

その際、「僕」にばらすと意味が無いということ、葵との関係はふせつつ、SNSで「僕」に近づいた。

同じ高校の同じ部活ということ一度は怪しんだ「僕」であったが、結局あの快感が忘れられず、会う事を決める。



…本当に見ながらしごいてるし、理解できない。  
こんなことにお金使ってて恥ずかしくないんですか？

ぽよん♡

ムムム

ムムムムムム  
ムムムムムム  
ムムムムムム

ムムム

ムムム

ムムム

グ  
ムムムムムム  
ムムムムムム  
ムムムムムム

ムムム

はあ、いや別に怒ってないですよ。お氣になさらず。  
こうやって胸を見せてればいいんですよ？  
さっさとしてください。  
あと、約束したとおり服にかけるのはいいですけど、顔は不快なのでやめてくださいね。



僕は彼女に頼んでその豊満な胸元を見せてもらいながら、自分のそれをしごいていた。二度目といえど相手も変わり、この興奮と快感にそうそう慣れることはなさそうだ。

彼女は、葵ちゃんとは反対にキリツとした印象と、豊かに育ちきった胸のせいもあって、年齢よりもずっと大人びて見えた。

タイプの違いはあれど、葵ちゃん同様、僕みたいな人間が相手してもらえるレベルではない。

連絡をとっていた際も終始礼儀正しい対応だったが、言葉の端々にどこかトゲがあるような気がしていた。

どうやらその予感は当たっていたらしく、会ってからどこかピリピリとしていた。

育ちは良さそうだし、お金にも困ってなさそうな彼女がどうして僕に連絡をとってきたのかはまだわからない。

何か理由があるのかもしれないが、

この状況で冷静になれるはずもなく、

また、その彼女のトゲトゲしい対応に僕は恥ずかしながら興奮していた。

葵ちゃんとは違い、あきれただけでなく確かな嫌悪が向けられている。

その冷たさが下半身を限界まで熱くする。

僕は情けない自分を恥じるように

小さく「ごめんなさい……。」とつぶやきながら、彼女の胸に吐き出した。

(……こんなにたくさん……。ドロドロして気持ち悪い……。  
葵ちゃんもこんなこと、なんでまたしようなんて……)

ごめん？…怒ってませんってば。こういう顔なんです！

…興奮して気持ちよかった？  
はあ…。別に聞いてませんけど。



ゴキリ！

アハハ

ドクッ

ジュルル

アハハ

アハハ

射精により一瞬冷静さを取り戻した僕は、キツとにらみつけてくる彼女に底知れない恐怖を覚えた。

嫌悪というよりも、もはや軽蔑をも含んだ彼女の冷たい目に、僕はどれだけみつももなく恥ずかしい人間に映っているのだろうか。

自分よりも年下の女の子にそんな目を向けられても悔しさすらわいてこない。それどころか、さっきまでおびえていたはずなのに、この情けない状況にまた僕の下半身は熱くなっていく。

それに気づいたのか、彼女は一瞬僕のそれを見てからため息をつき、「……続けるならさっさとしててください。」と冷たく言い放った。

怖さと期待が混ざりあった心地よいスリルを抱きながら、震えた声で場所を変えたいと希望を伝えた。

彼女は無言でうなづき、僕らは保健室に向かった。



あ...

たゆん♡

保健室に来てまで何をするのかと思えば  
おへそが見たいなんて...  
それならどこでもよくないですか？

...変態の考えることはよくわかりませんね。  
...なんて変態って言われて喜んでるんだか。  
ニヤつきながらしごいてるの  
気持ち悪いですよ。

...はあ。  
気持ち悪いって言われて  
嬉しそうにしないでください。

本当に終わってますね。

あなたの性癖には興味ないので  
さっさと済ませてください。

シク  
シク

シク  
シク  
シク

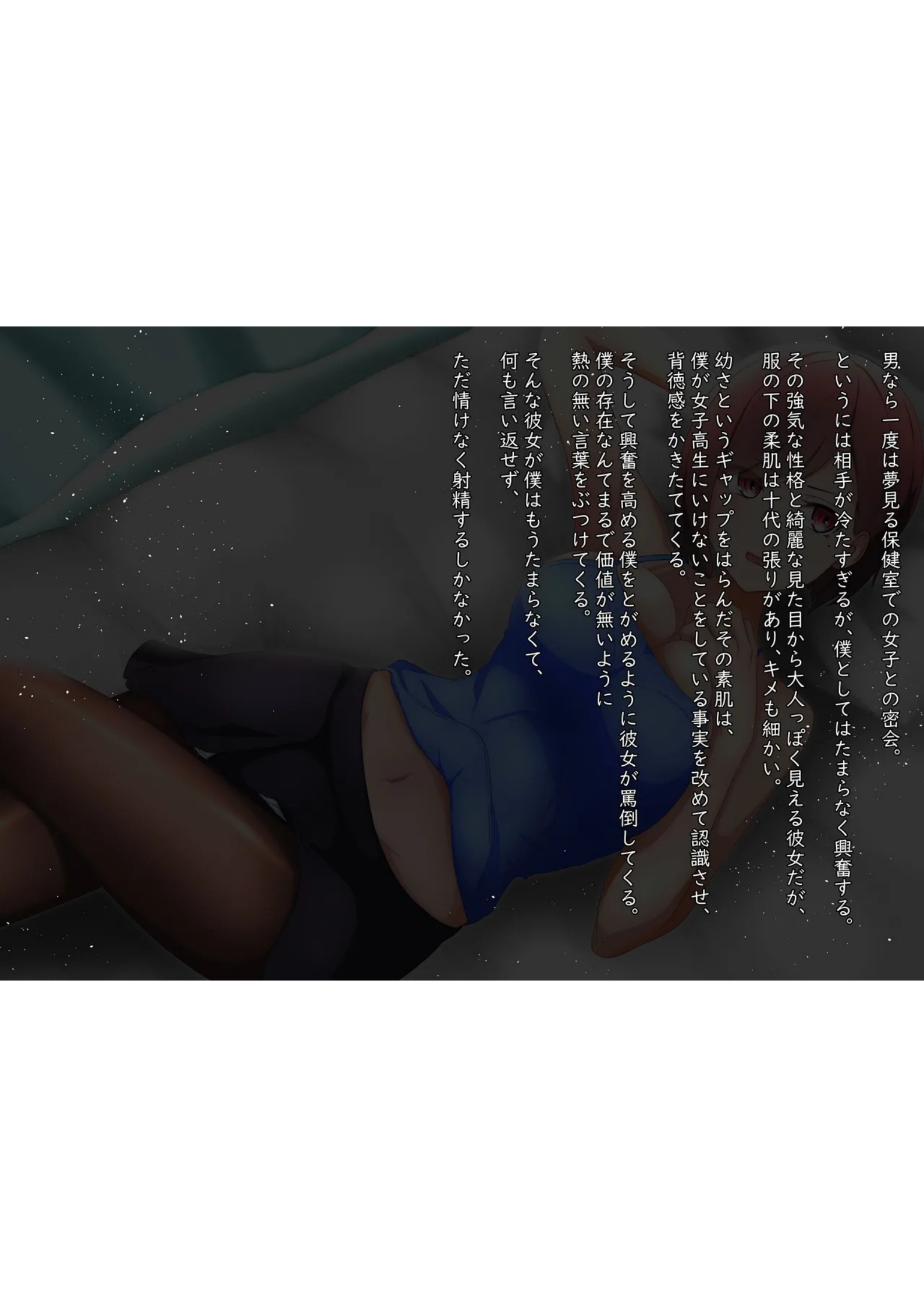
シク  
シク  
シク

グ  
グ  
グ

ク  
ク  
ク

ア...

フィル  
フィル



男なら一度は夢見る保健室での女子との密会。

というには相手が冷たすぎるが、僕としてはたまらなく興奮する。

その強気な性格と綺麗な見た目から大人っぽく見える彼女だが、服の下の柔肌は十代の張りがあり、キメも細かい。

幼さというギャップをはらんだその素肌は、

僕が女子高生にいけないことをしている事実を改めて認識させ、背徳感をかきたててくる。

そうして興奮を高める僕をとがめるように彼女が罵倒してくる。

僕の存在なんてまるで価値が無いように熱の無い言葉をぶつけてくる。

そんな彼女が僕はもうたまらなくて、

何も言い返せず、

ただ情けなく射精するしかなかった。



…っ！  
(うそでしょ？さっきも出したのに  
まだこんなに…。)  
男の人ってみんなこんなものなの？)  
え？へそがかわいくて興奮した？  
…はあ…。  
変態にかわいいって言われても  
まったく嬉しくないんですが。

次は水着との約束だったので葵ちゃんの時と同様、彼女には先に着替えに行ってもらった。

僕は後始末をしつつ、水着姿の彼女を想像した。

あのはちきれそうな二つのふくらみが、水着の圧力に負けずに主張してくるはずだ。

そんな直接的な刺激も確かに楽しみだ。楽しみにしているが…心の底でどこか期待しているのは、あの冷たさだ。

葵ちゃんの時のように、慣れてきたからこそその砕けた態度やあきれではなく、

彼女にとつて

僕が不要で無価値であると定義づけられたからこそその対応だ。

ゆがんだ性癖の変態であるものの、それでも、妄想や葵ちゃんにしてもらったような演技ではなく、心からの拒絶は容赦なく僕の自尊心を削っていく。

一時の快感のために僕は戻れないほど落ちてしまうかもしれない。

今ならまだ…。

そんな迷いはうらはらに僕の脚はプールに向かっていった。

まさか泳ぐ以外の目的で……って水着になるとは思ってませんでしたよ。  
まあ、この方が洗いやすくもいいかもしれませんが。

それにしてもあれだけ出してまだ……

……といふかなんかさっきまでよりも大きくないですか？

水着が似合ってるから？……性能重視なのでどうでもいいです。

フンッ

ムギチ♡

ムギチ♡

グググ  
ムンムン

アアア

ムンムン!!

ムンムン!!

ムンムン!!

アアア

ムンムン

ムンムン

ムンムン!!

アアア  
グググ

じっくり楽しみたいのにしごく手の速さを緩めることは出来ない。

彼女の水着姿は期待通りの迫力だった。

水着の圧力をものともしない二つのふくらみ。

きつめの締め付けが、よりそのはちきれんばかりの質量を引き立てている。

そんな風に欲情している僕だったが、彼女はそんな事など無関心という態度。

着替えの時間を置いたからなのか、多少やわらいでいるものの、依然として熱の無い言葉と態度だ。

ゾクゾクと背中を快感が走る。

彼女は誠実だ。

約束はきっちり守っていてくれている。

それでも、それだけだ。

僕はこんなにも彼女に釘付けなのに、

彼女にとって僕は文字通り眼中にない。

この距離はけして縮まらない。それどころか、より深く離れていくだけだ。

彼女の心にも体にもふれられない。

唯一とどくのは、僕のこの情けない精液のみだ…。



彼女はあいかわらず冷たいが、何かしら納得した様子だった。

当初より、あからさまに嫌悪感をぶつけてくる彼女が、  
そもそもなぜ連絡してきたのか不思議だったが、  
その目的が果たせたのだろうか。

ともかくにも、少しでも関係性がやわらいだのならいいはず。  
それなのにどこか物足りなさを感じてしまう。

理由は明白だ。

彼女の冷たさが恋しいのだ。

軽蔑されて怒られたい。

彼女の罵倒を想像するだけで心臓がバクバクする。

僕はわざとねちっこく変態的に、彼女に最後のリクエストをした。

おどおどとお願いするから何かと思えば、谷間見せてって...  
しかも胸の肉を締め付けてはみださせるようになって...  
気持ち悪い。

はあ...

水着ひっぱるの疲れるので、  
はやく済ませてもらえませんか？

って言わなくても

もう今にも爆発しそうじゃないですか...

あれだけ出して、まだ出し足りないんですか？

...これだから変態は。

さっさとイッてください。



僕は醜い欲望を、  
つくろわずそのまま要求としてぶつけた。

彼女は期待通り、隠すことなくその嫌悪と軽蔑を顔に出し、  
僕をことさら罵倒した。

それは期待以上に僕の下半身を熱くたぎらせた。

なんともゆがんだ快感。

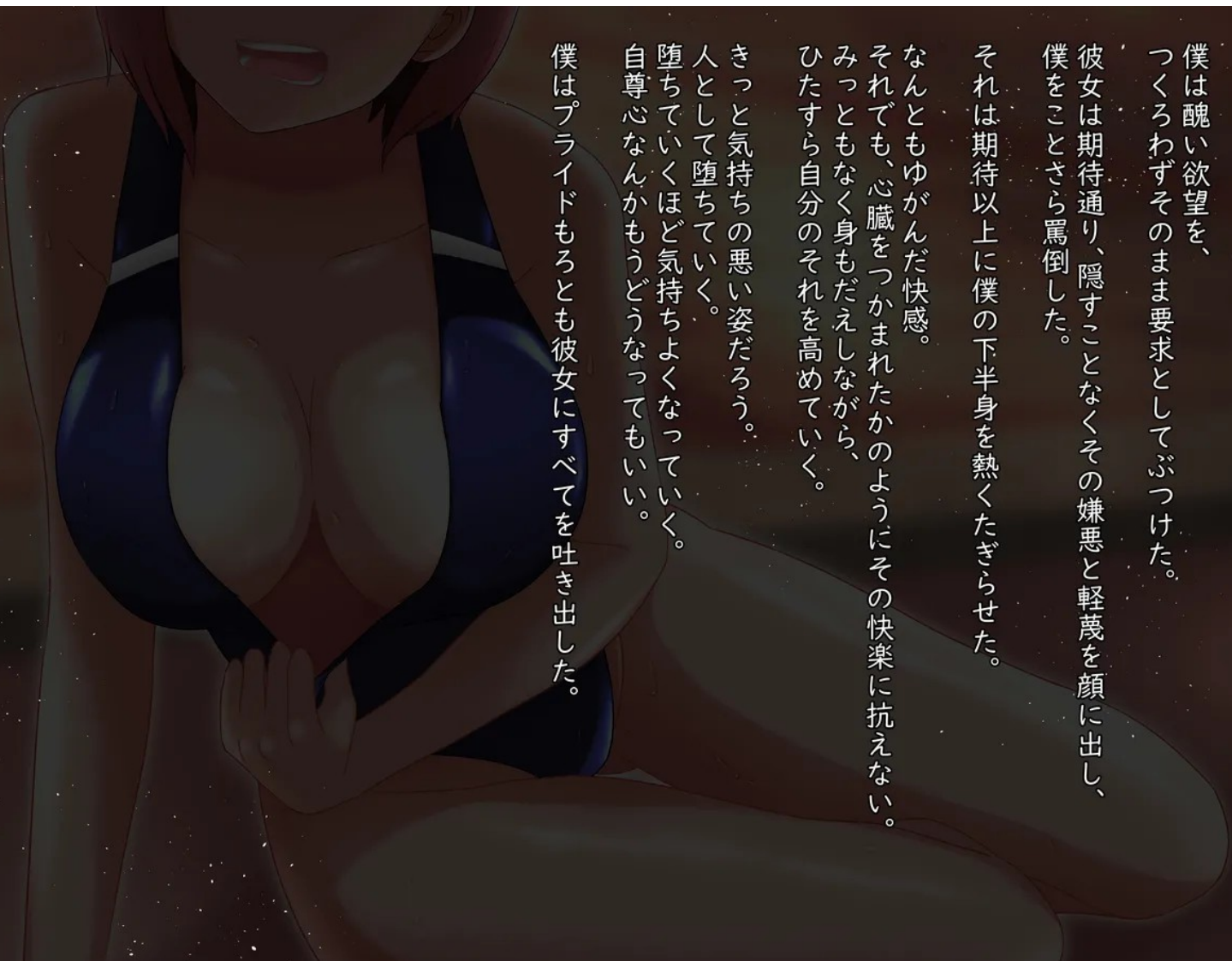
それでも、心臓をつかまれたかのようにその快樂に抗えない。  
みっともなく身もだえしながら、  
ひたすら自分のそれを高めていく。

きつと気持ちの悪い姿だろう。

人として堕ちていく。

堕ちていくほど気持ちよくなっていく。  
自尊心なんかもうどうなってもいい。

僕はプライドもろとも彼女にすべてを吐き出した。



あの、私最初にいましたよね？

不快なので、  
顔にはかけないでくださいって。

…はっ？  
気持ちよくてコントロールできなかった？  
知りませんが。

(こんなんじゃ  
興奮して葵ちゃんに何するかわからない…)

…はあ、わかりました。  
これは少し教育が必要ですね。

また後日呼び出しますので、さよなら。



ゴゴゴゴ...

ジュッ

ズバッ

ジュッ

ジュッ

ジュッ

ジュジュジュ

ジュッ

おっ

グググ...

勢いまかせに射精した僕の精液は彼女の顔まで届いてしまった。

きれいな彼女の顔から、したたりおちる僕の汚れた精液。

僕に関心の無い彼女の唯一の要求であった

「顔にはかけないこと」

それを興奮のあまりやぶってしまった。

まずいとは思いつつも、

快感は止めようがなく、あとから続く残りの精液も

勢いよくあふれだした。

出し切ったところで我に返り

最初は怖くて彼女を見ることができなかったものの

勇気を出して顔をあげた。

意外にも彼女は初めて僕に笑って見せた。

ただ、笑っていたのは口元だけで

その言葉も目も、けっして笑っていなかった。

ただ、それも一瞬のことだ

「また後日」と残して彼女は去っていった。

ホッと胸をなでおろしたものの、

彼女の口からでた「教育」。

どんなふうにも僕は彼女に教育されてしまうのだろうか。

もっと墮とされてしまうかもしれない。

それでもきつと僕は、彼女に呼ばれれば断れない。

そんな期待と不安を胸に、僕は学校をあとにした。

3-1-03 鳴宮 未希 の場合

# 鳴宮 未希

Miki Narumiya

160cm

B:83

W:59

H:89



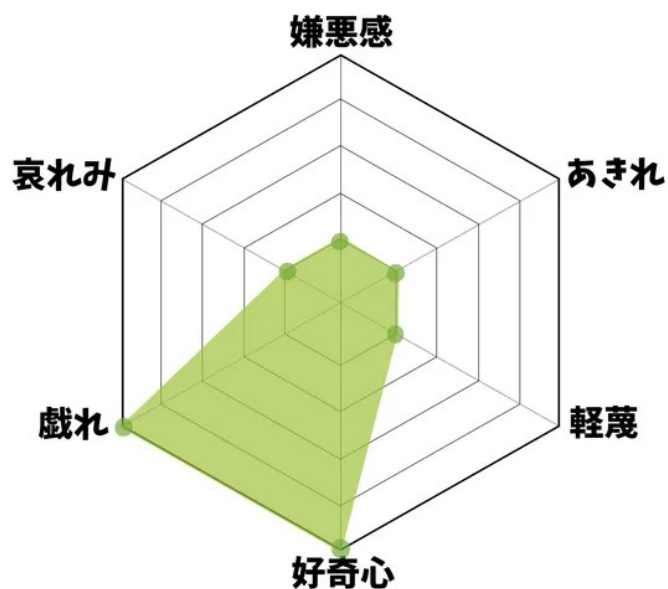
高校2年生で水泳部部員。


いたずらっ子な一面もあるが、  
基本的に裏表なく元気で明るい性格。  
誰とでもすぐに仲良くなれ、男女ともに友人に恵まれている。

活発でさっぱりした性格から、男子にとっては  
好きな女子というよりも仲の良い女友達として認識されている。

もっとも、その人懐っこさからくる距離感の近さに、  
耐性の無い男子が勘違いをすることも多い。

意外にも本人はそのことに敏感に感じており、  
もんもんとしてる男子に気付いていないフリをしながら  
わざとくっつき、動揺させて楽しむこともしばしば。





未希は、先輩である茜の男子部員に対する厳しさが最近増していることに気づき、何気なくたずねてみた。

普段ならしようなもないことを聞くなと怒られるところ、思いのほか茜が動揺したので勢いで問いただした結果、「僕」について知ることになる。

未希は、日常的に男子をからかって楽しんでいたものの、どこか物足りなさを感じていたため、これは新しい刺激を得るチャンスだと考えた。その結果、未希はしつこく茜に頼み込み、「僕」と連絡をとることになる。

さすがに同じ学校で、しかもつながりのある子ばかりだと危ないかもしれないと「僕」はしづんでいたが、未希から送られてきた。「これ、当日履いていくつもりの下着なのに、見せられないの残念だなー♪」というメッセージと写真の誘惑に負け、結局会うことに決めた。



運動しやすそうにさっぱりと切られた短い髪に、少年のようないたずらっぽさをはらんだ笑い方をする女の子。そのさばさは具合から、思春期の男友達からは男っぽいとからかわれそうなタイプ。

しかし、じっくりと観察すれば、引き締まった健康的な身体に、つやつとしたきめ細かくやけた肌。化粧など一切しなくとも、綺麗に整った目鼻立ち。成長していけば、いずれ男を魅了する美しい女性になるだろう。

それでも今の彼女は元気で明るいスポーツ少女に間違いない。

そんな彼女が、ただただ男の性欲をかきたてるためだけに作られたような下着を身にまとい、男をもてあそぶかのように笑って僕のぶざまな自慰行為を見ている。

背徳感が気持ちよさを高めている。

クラスの男子も知らない彼女の女の一面。それを僕だけが今独占している。

そんな背徳感と優越感に押し上げられ、快樂の頂点に達した僕は、その卑猥な彼女の下着めがけてぶちまけた。



彼女は興味津々という感じで僕の精液をまじまじと眺める。

体は大人に差し掛かっているが、心は思春期の高校生ゆえの異性への好奇心に溢れている。普通はそれでも照れるものだが、そこに恥ずかしさが無いのは彼女のまっすぐな純粹さからだろう。

そんな無垢な少女の体に、大人の僕の汚いそれがべつとりと絡みついている。アンバランスな光景に、僕の下半身はドクシと脈打つ。

あきれでも、嫌悪でも、ましてや軽蔑でもない。

ただ、僕個人に対する好意もそこにはない。

シンプルに少女の性への好奇心の対象となっていて、という事実も、よりゆがんだ関係性を際立たせていて、僕の欲情をかきたてる。

僕は自然とまた熱くなったそれを握っていた。



おーおー！  
聞いてた通りすごいね。

さっき出したばっかなのに  
もうそんなにシコシコできるんだ？  
変態には賢者タイム？って言うんだっけ？無いのかな笑

どうどう？喜んでくれた？  
苗先輩の見た後だから、  
胸は見劣りしてるだろうけどさ。

おしりは  
けっこういけると思うんだよねー♡  
ほれほれ〜♪

むちゅん♡

んんん♡  
んんん♡

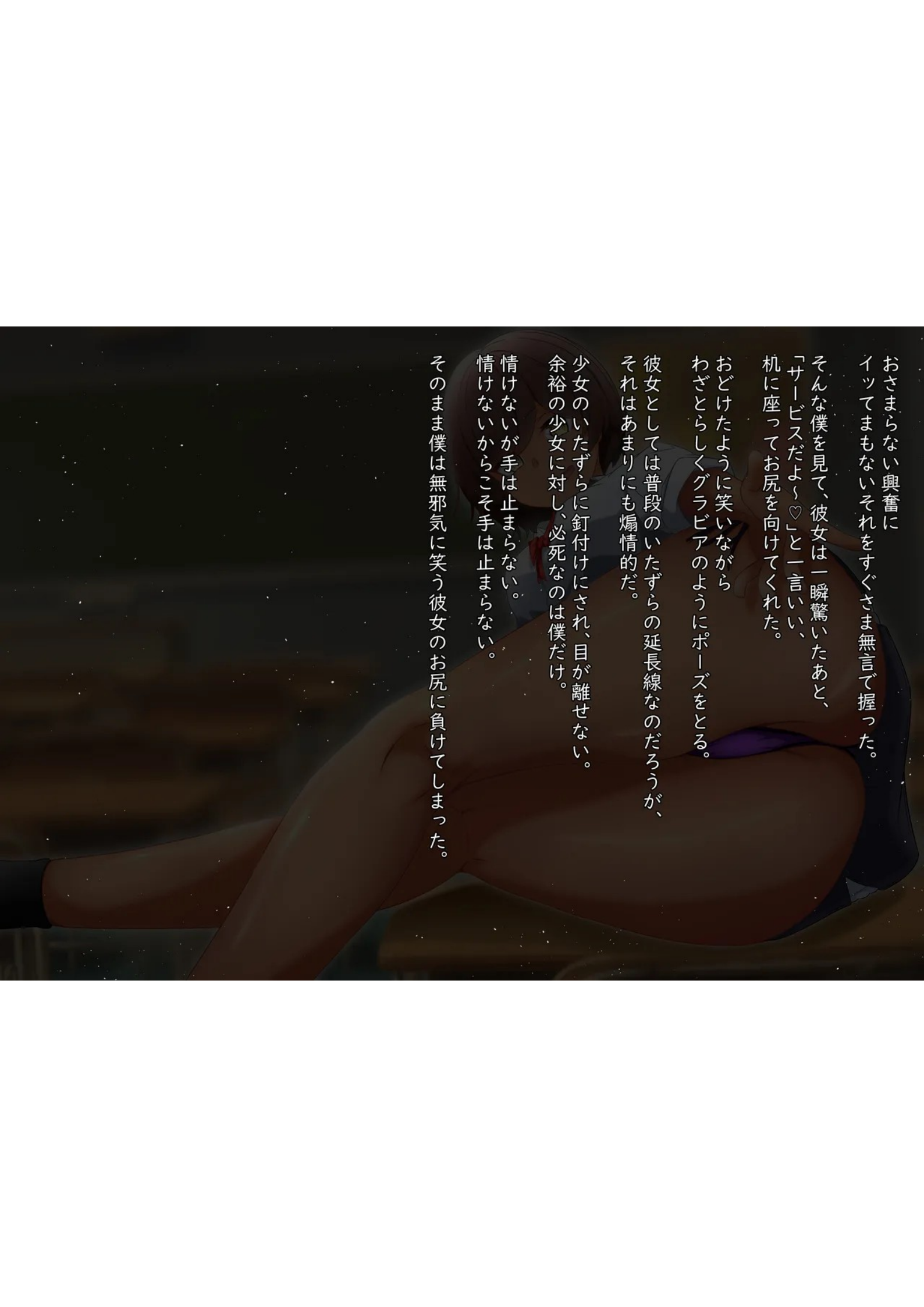
んんん♡

んんん♡

んんん♡

んんん♡

アッアッ



おさまらない興奮に  
イッてまもないそれをすぐさま無言で握った。

そんな僕を見て、彼女は一瞬驚いたあと、  
「サービスだよ♡」と一言いい、  
机に座ってお尻を向けてくれた。

おどけたように笑いながら  
わざとらしくグラビアのようにポーズをとる。

彼女としては普段のいたずらの延長線なのだろうが、  
それはあまりにも煽情的だ。

少女のいたずらに釘付けにされ、目が離せない。  
余裕の少女に対し、必死なのは僕だけ。

情けないが手は止まらない。  
情けないからこそ手は止まらない。

そのまま僕は無邪気に笑う彼女のお尻に負けてしまった。



ニカッと爽やかに笑う彼女のおしりは  
僕の精液でけがされている。

彼女はこの異様な状況を楽しんでいるようだが、  
好奇心と無邪気につけこんだ罪悪感で胸が締め付けられる。

そして、その罪悪感がゾクゾクとゆがんだ快楽をひきつけてくる。

彼女はそそくさと身ぎれいにしたあと、  
すぐに水着に着替えに向かった。

連絡していたときに見せられた下着にも期待していたが、  
彼女から水着はちよつと変わったやつにすると言われていたので、  
ずつと気になっていた。

僕としては普段使っているものの方が  
背徳感があって好みなのだけれど、

いたずら好きそうな彼女がなにやら楽しそうに企んでいたの、  
それはそれで面白いかなと思ひ、彼女に任せることにしていた。

そんなやり取りを思い出しつつ、  
僕も後片付けを終え、プールに向かった。



彼女にまかせてよかった。

もちろん、彼女の普段の水着も見たかったが、これはそんな思いもふきとばすような迫力だ。

ただでさえ、魅力的な彼女のおしりを、より大胆に見せつけてくる造形。

そして人工的でなく自然にやけた健康的な小麦色の肌を、際立たせるような水着の白さ。

彼女の言う通り、こんなものを思春期の男子が見せられた日には、冷静でいられないだろう。しかも、彼女自身それを楽しんでいたのだ。

普段彼女を女の子扱いしないような思春期特有のいじめっ子気質の男子が、情けなく縮こまってしまふ。

それはもういたずら好きな彼女にとっては極上の快感だろう。

きつとその男子たちは悔しがりながらも

その日はこのおしりで頭がいっぱいで、

情けなく彼女を想い、ティッシュに吐き出すしかなかっただろう。

そんな彼らの妄想を僕は今現実に行っている。

彼女がこんなことをしているなんて一ミリも思っていないだろう。

そんな贅沢すぎる優越感とともに快感が限界まで押し寄せ、

たまらず僕は彼女のお尻目がけ射精した。

…んっ♡

慣れてきたけど、やっぱり男の子の射精ってすごくてえっちなね。

こう、何度もたくさんあつついのかけられてると  
さすがに変な気分になっちゃうよ…。アハハ笑

……部活の男子たちも、  
私のこと妄想してシコシコしてるのかな…。



そう思うと、恥ずかしいけどなんかゾクッとしていいかも…♡  
また今度からかってみようって笑  
次で最後かな？  
おにーさんには楽しませてもらったから、お礼にサービスしちゃおう♪



ゴキウ  
ヌルル

ヌゼク  
ヌツ

びゅん  
クダクダ  
クダクダ

うしろからぶっかけられた僕の精液を見ながら  
部活の男子について話す彼女の顔は、今まで見せなかったような女の顔になっていた。

普段のいたずらは

きつと彼女の小さいころから変わらない「からかい」の範疇で、

「もてあそぶ」ようなものではなく、

それは彼女にとって「面白い」であっても「性的な快感」ではなかったのだろう。

ただ、こうして自分の体に大人の男が情けなく夢中になり、

みっともなくイキ果てる姿をここまで見たことで、

自分の女としての価値を自覚し始めたのかもしれない。

いずれ、彼女の男子を「からかう」行為は、

男を「もてあそぶ」行為になっていくのだろう。

いたずら好きな少女と魔性の女が混在しているこの過渡期を僕はもっと味わいたい。

僕は彼女に言われるがままに、プールサイドに横たわる。

彼女はビンビンに主張するそのの上に来るよう僕にまたがり、ニコツと妖艶に笑った。

僕は彼女を見上げながら無言でしごき始めた。

ふふーん♪

そのシゴキようを見ると  
下からの景色、お気にめしたみたいだね〜♪

すぐ上には

おにーさんが必死にシコシコしてるそれを  
入れられる場所があるのにさ。

変態さんはふれることも許されないから、  
悔しがりながらも

自分で気持ち良くなるしかないんだよね〜笑

ゴックン。

キツッパ

なーんて、違うよね。

今日見てて、わかっちゃったよー♪

おにーさんみたいな変態は、

こんな情けない状態の自分を

女の子に見られるのが嬉しいんだよね♪

ふふっ大人なのに、

いけない変態さんだ笑

でも、面白いよ♪

だからさっ、変態さんのカッコ悪いところ

もっと見せて楽しませてよ♡

アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ

いたずらっ子な少女も魔性の女も、  
きつと本質は同じなのだろう。

相手を手のひらで転がし、そのゆがんだ表情を楽しむ。

無意識に今彼女もそれを理解したのだろう。

すべてを見抜くようなねっとりとした女の目で  
僕を見て楽しんでいるかと思えば、

少女のようにキヤツキヤツと笑う。

熟練の女性といたいけな少女に  
同時にもてあそばれているような感覚に陥る。

すべてをゆだねて転がされてしまいたい。

快楽の道におとしてほしい。

そんな思いを高校生の少女に抱くとは思ってもいなかった。  
限界はもう近い。

それを見透かし、許すかのように彼女はフツツと笑った。

そんな彼女に  
僕は自分のすべてを差し出すように、一滴残さず絞り出した。



すべてを出し切り、ぐったりしている僕を見下ろしながら彼女は笑っていた。

あきれや、あわれみ、嫌悪や軽蔑はほとんどない。

そこにあっただのは無垢で純粋な少女の好奇心。

その好奇心が、

僕を人ではなく新しいおもちゃ、

つまりはモノとして認識している。

この先もまた遊ばれてしまうのなら

それは少しずつ、

でも、確実に僕を人からモノに墮としていくだろう。

そうだとしても、おもちゃとしても、

彼女の手のひらでなら転がされていたい。

僕の変態さを笑って楽しんでもらいたい。

予想外のことも多かったが、

期待以上の満足感に胸をいっぱいしながら

僕は学校を出ていった。

## 【エピソード】

三人の女子高生との出会いは、まるで夢のようだった。健全に育まれた彼女たちの肉体は、どうしようもなく、不健全だった。

こんな僕にはもったいないくらい魅力的な少女たち。幼さゆえにまっすぐとその感情をぶつけてくる。

ゆがんだ僕にとっては、そのまっすぐさはまぶしくてどうしようもなく惹かれてしまった。

この先、どうなってしまうのか。まったく想像もつかない。

それでも、僕はもう知ってしまった。ずっと嫌でたまらなかった情けない自分の、一番醜い姿を見られることの快感を。

後戻りはもうできない。でも、後悔はない。

この快感を得られるのなら、どこまでも堕ちていったいい。

そんな恥ずかしい決心をしたと同時に僕のスマホがなった。息が荒くなり、心臓が高鳴る。

僕は期待と不安で震える手を、ゆっくりとスマホにのばした。



ふっかしかけ  かーる

～水泳部JK編～

to be continued